

## 「ライオンと魔女」～自責の杖の真相～

同志社国際学院初等部 宗教科教諭

石川 眞弓

彼が刺し貫かれたのは  
わたしたちの背きのためであり  
彼が打ち砕かれたのは  
わたしたちの咎のためであった。  
彼の受けた懲らしめによって  
わたしたちに平和が与えられ  
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた

（旧約聖書イザヤ書 53 章 5 節）

同志社の創立者・新島襄に関わる数あるエピソードの中でも、「自責の杖」と呼ばれる事件は、恐らく最も有名なものでありましょう。

9 年間の留学生活を終え、数多の試練を乗り越えて同志社英学校を発足させた新島襄は、更に大学設立という大きな夢へと踏み出すべく、募金活動に励んでいました。一方では日本各地でキリスト教の伝道に励み、「自由教育」と「自治的な教会」が並行して発展していけるように、心を砕いていました。

英学校開校から 5 年が経った、1880 年春のことです。新島がこのような事情でいつものように旅に出かけ、一ヶ月ばかり留守をして帰って来た時、学校は大変な騒ぎになっていました。というのも、教員らが 9 月に入学した学生たちと翌年の 3 月に入学した学生たちのクラスを合併して同じ級にしようとしたため、先に入学した学生たちが猛反発してストライキを起こしたからなのです。上級組の学生たちは学校に対して不服を申し立て、意見が受理されないと見るや、授業を集団で無断欠席しました。新島は帰校後一人一人の学生の言い分を聞き、事件は一応収まりましたが、「無断の集団欠席」は校則違反であり、これを破ったことに対する責任問題は残りました。そこで 4 月 13 日の朝、礼拝終了後に新島は壇上で全校教員と学生たちに次のように語りかけました。

「今回、学生の集団欠席という校則違反を出してしまったことは、教員が悪いのでも学生が悪いのでもありません。ひとえに校長の落ち度であり、不徳の致す所です。よってその責任者たる校長を罰します。」

語り終えるや否や、新島は持ってきた杖でいきなり自分の手を打ち始めました。あまりに激しく打ったので杖は折れましたが新島は打つのを止めず、我に返った学生の一人が止めに入るまで、夢中で自らを打ち続けたと言われています。きっと手は真っ赤に腫れ上がり、血も滲んでいたことでしょう。

この事件はその場にいた教員たちにも学生たちにも、強い印象と深い感動を与えました。けれどもこの新島の解決の仕方に納得がいかず、<sup>つまず</sup>躓いた学生もありました。徳富猪一郎<sup>い いちろう</sup>すなわち後の徳富<sup>そほう</sup>蘇峰がその人です。彼はこの事件の後で自主退学し、ジャーナリストの道を歩むことになります。

恐らく現代の私たちの中にも、この「自責の杖事件」のエピソードを聞いて感動する人ばかりではなく、首を傾げる人も一定数存在するのではないのでしょうか。そもそも、なぜ新島襄は学生たちの無断欠席の責任を負って、自分一人の身を傷つける必要があったのか？たとえ学生たちの方に同情できる言い分があったとしても、私立の学校に入学してきた以上、校則を破った場合はその学校が定めた罰則に従うのが当然ではないのか…？今、教員側にいる私などは、ついそのような考え方をしてしまいます。しかしながら新島の行動は、このような論理や常識を超えていました。普通に考えたのでは、どうしても納得のいく説明はできないのです。ここで私たちは、基督教の「<sup>しよくざい</sup>贖罪」というものについて思い起す必要があります。

イギリスの児童文学で「ナルニア国物語」というシリーズがあるのをご存じの方も多いと思います。中でも「ライオンと魔女」には基督教の教えの中心的な部分が、しっかりと描き込まれています。

時代は第二次世界大戦中、日本と同じくイギリスでも、都会の空襲を避けて子どもたちだけ地方へ疎開するということが行われていました。自宅のあるロンドンから、ある片田舎の大きな屋敷に預けられることになった四人の兄弟姉妹は、ふとしたことがきっかけで空き部屋<sup>いざな</sup>の大きな衣装ダンスの扉から、今まで見たこともない別世界へと誘われることになります。そこは「ナルニア国」と呼ばれる場所で、そこで四人は動物や植物が人間の言葉を話すのを見聞きし、ギリシア神話に登場するような半身半獣の生き物とも遭遇します。この国には「アスラン」という、ライオンの姿をした真の王が存在しますが、王が国を留守にしている間に「白い魔女」と呼ばれる悪魔が女王として振る舞い、この国を永久に春の来ない、冷たい氷の世界に閉ざそうとしていました。しかしながら、この国には昔から言い伝えられてきた古い予言があり、ナルニア国の住人達は長年、その予言の実現を心待ちにしていました。それは

こういうものです。「アダム肉、アダム骨がケア・パラベルの王座について、わるい時世がおわるもの。」（注 1）

これをもう少し詳しく解説しますと、ケア・パラベルというナルニア国のお城には四つの王座があって、二人のアダムの息子たち—つまり二人の人間の男性—と、二人のイブの娘たち—つまり二人の人間の女性—が、この四つの王座に就いた時、白い魔女の時代は終わり魔女の命もお終いになる、という内容でした。この古くからの予言を白い魔女もよく知っていたので、四人の人間の男女がナルニア国に入って来るのを何としてでも阻止したいと考えていましたし、万一彼らがこの国に入って来ようものなら、容赦なく命を絶ってしまうつもりでした。ところが四人の兄弟姉妹のうち、末っ子の妹に続いて二番手にナルニア国に入り込んだエドモンド少年は、あろうことかいきなりこの白い魔女と遭遇してしまうのです。彼はナルニア国について熱心に語る妹の言葉を信じないで嘲笑し、意地の悪い態度ばかり取っていたせいで思いがけずこの災難に遭うわけですが、最初は美しい貴婦人のような姿をした白い魔女の恐ろしさに、全く気付いていませんでした。言われるままに魔女のそばに座り、今まで食べたこともないような甘く、舌がとろけるお菓子をもらって食べ、身も心も白い魔女の虜になってしまいます。魔女の目的はもちろん、この食いしん坊の少年一人を手なずけて、残る三人の兄弟姉妹を一網打尽にすることでした。後にエドモンドは嫌というほど白い魔女の恐ろしさを知ることになりますが、その時は既に遅く、自分一人の力では魔女から逃げ出せないばかりか、他の兄弟たちも殺されようとしているのに、それをどうすることもできないのでした。三人の兄弟姉妹は彼らの大切なエドモンドが白い魔女に捕まってしまったことを知り、この国の真の王であるアスランに助けを求めます。

アスランは真の王であるゆえ、その力と威厳は圧倒的で、白い魔女は彼の前に出た時、虚勢を張ってはいても、決してその目を見据えることはできませんでした。けれども、このアスランといえども決して抗うことのできない古い掟がありました。このナルニア国ができる時にあたって、アスランの父である「海のかなたの国の大帝」が下した魔法の掟です。それは「裏切り者」は、ことごとく白い魔女の餌食となり、魔女はこの裏切り者に死を与える権利が与えられる、というものでした。もしこの最初の古い掟が破られたならば、ナルニア国はたちまち覆って、滅びてしまうのです。それほどに「海のかなたの国の大帝」が世の初めに定めた掟は厳しく、犯してはならぬものでした。この掟の通りならば、自分の兄弟姉妹を裏切ったエドモンドは白い魔女に引き渡されるしかなく、そこに待っているのは罰としての「死」のみでした。

結果的に、エドモンドは死を免れて救い出されるのですが、アスランはどんな方法を取ったのでしょうか。それはエドモンドの身代わりとなって、自らの命を白い魔女に差し出すことでした。実は「海のかなたの国の大帝」が下した魔法には、魔女の知らないもっと古い掟がありました。それは、何の裏切りも犯さない者が進んで生け贄となって裏切り者の代わりに殺された時、掟が書かれた石板は砕け、死は振り出しに戻る、というものです。これがアスランの

行った、エドマンドの罪の贖<sup>あがな</sup>いでした。

さて、先ほど「ライオンと魔女」の物語にキリスト教の中心的メッセージが込められていると申し上げましたが、この物語の「アスラン」というライオンはイエス・キリストを表し、エドマンドは罪を犯した人間を指します。人間は神に愛され、本来は地を受け継ぎ平和に治める者として創造されましたが、四人の子どもたちで表現されているように人間の内部には様々な性質があり、時にはエドマンドのように悪魔と手を組むような背信行為をしてしまうこともあります。そしてこの大きな罪を抱えたままでは、決して平和の国の王座に就くことは許されないのです。

通常、礼拝堂と呼ばれる建物の内部には、必ずこのようなテーブルが前に置かれています。これは「<sup>せいさんたく</sup>聖餐桌」と言いまして、本来「聖餐式」という式典を執り行うための台です。神の子イエス・キリストが人類の罪を赦すために十字架上で裂かれた体と、流された血とを記念するために二千年前から行われてきた儀式で、人々にキリストの体なるパンと、キリストの血なるぶどう酒を分けるためのテーブルを模したものです。学校で本物の聖餐式が行われることはありませんが、キリスト教の礼拝で「贖罪」はあらゆる教えの核となるものですから、このテーブルの存在意義は極めて大きいのです。有名なレオナルド・ダ・ビンチの「最後の晚餐」の場面が、今もここに再現されているとお考えいただいていいでしょう。

さて、ここで新島襄の「自責の杖」事件に話を戻します。恐らく新島自身は「自分はキリストのように、学生たちの罪を背負って身代わりになるのだ。」などとおこがましいことを考えて自らを打ったわけではないかも知れません。しかし、新島の「自責の杖」こそが、キリストの贖罪とはどんなものであるか、その一端を表した出来事であったことは疑うべくもありません。熊本バンドと呼ばれた学生たちは皆、頭脳明晰で優秀な者揃いで、新島本人や宣教師デイヴィスにさえ、神学論争を吹っかけて答えに詰まらせていたといえます。特にキリストの贖罪論は説明が難しく、教師たちは彼らに相当手こずらされたようです。はっきり言ってしまえば、新島は神学論争で学生たちを屈服させることはできなかったのです。しかしながら徳富猪一郎、後の徳富蘇峰は、自主退学後に「同志社大学設立の旨意」の文章を書くのを手伝い、新島襄の最期の時には最も大切な同志社への遺言を書き留めました。蘇峰は「新島先生は頭の人ではなく、心の人だった。」（注 2）と語ったそうですが、頭脳では理解できなかった「贖罪」を、後に心で受けとめられるようになったからこそ、熊本バンドの青年たちはその後の同志社の礎となっていけたのではないかと考える者です。

(注 1) C. S. ルイス 作 瀬田 貞二 訳

『ナルニア国物語 I ライオンと魔女』岩波書店 2005 年第 50 刷改版

103 頁 13 行目～104 頁 1 行目

(注 2) 本井康博著『小新島たらん』新島襄を語る・別巻(六) 同胞舎新社 2022 年

193 頁 9～11 行目

<参考文献>

・C. S. ルイス 作 瀬田貞二 訳 『ナルニア国物語 I ライオンと魔女』岩波書店 2005 年  
改版第 50 刷

・アン・アーノット著 中村妙子 訳 『C・S・ルイスの秘密の国』すぐ書房 1978

・クリスティン・ディッチフィールド著 中嶋典子 訳

『「ナルニア国物語」ガイド—家族で楽しむために—』いのちのことば社 CS 成長センター

・本井康博著 『小新島たらん』新島襄を語る・別巻(六) 同胞舎新社 2022

・『新島襄への扉』編集委員会編 『新島襄への扉 真誠の自由を求めて』

日本キリスト教団出版局 2016 改訂版 4 版

・新島襄編集委員会 編 『新島襄』新島襄刊行会 2018 第 7 刷改訂版